

エツツェル版『赤と黒』をめぐって

高木, 信宏

九州大学大学院人文科学研究院文学部門 : 准教授 : フランス近代文学

<https://doi.org/10.15017/13960>

出版情報 : 文學研究. 106, pp.27-44, 2009-03-01. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン :
権利関係 :

エツツェル版『赤と黒』をめぐって

高 木 信 宏

1846年にエツツェル社が出版した『赤と黒』は、スタンダールの死後、遺言執行人であった彼の従弟、ロマン・コロンの尽力によって実現した刊本である。いわゆる批評校訂版ではないものの、資料的・学術的な価値が皆無かといえ、けっしてそうはいいきれない。というのも1830年刊行の初版本（ルヴァヴァスール書店、八折判全2巻）のテキストと突きあわせるならば、エツツェル版には興味深い異文が少なからず見いだされるからである。

これまで本文の異同について正面から論じたのは、管見ではアンリ・マルチノだけである。彼はエツツェル版のほかに、同じくコロンの編纂にかかわったミシェル・レヴィ版全集所収のテキスト（1854年）も併せて、初版の本文との照合をおこない、ヴァリエントをすべて調べあげたうえで、自ら注釈を施したガルニエ古典叢書版『赤と黒』（1939年）においてエツツェル版に異文が生じた理由を述べている。それによれば、自作の新版にそなえて作家の書き残した指示がコロンの手元にあり、エツツェル版刊行の際には彼は自身の手による訂正にくわえて、それらも利用したのだという¹⁾。もちろんこれは推測の域をでるものではないが、しかし大半の異文には微修正の意図が窺えることは確かである。1973年にガルニエ新版を校訂したピエール・ジョルジュ・カステックスは、おそらく慎重を期したのであろう。エツツェル版がどのように準備されたのか不明である旨を述べ、マルチノの考えを好意的に紹介するにとどめている²⁾。

エツェル版『赤と黒』をめくって

このように問題説明の手がかりはヴァリエーションの内容のみという、いわば行き詰まった研究状況にあって、重大な知見がストックホルム在住のスタンダール愛好家トーマス・フォン・ヴェーゲサックによってもたらされる。彼はエツェル版が含む最重要の異文について短い論考を専門研究誌「スタンダール・クラブ」(1977年・第75号)に寄稿し、それらの由来を明らかにした。詳細は後述するが、2005年に出されたプレイアド新版の註でイヴ・アンセルがヴェーゲサックの説を詳しくとりあげたように³⁾、その指摘はきわめて説得的なものといえよう。

ところで興味深いことにヴェーゲサックは、コロンのエツェル版の刊行に際して初版の清書原稿をもちいたのではないかと述べている。かりにそうだとすれば、同版の異文のなかには原稿段階の姿をとどめているものがあるかもしれない。清書原稿も校正刷りも、そして草稿すらも残されていない『赤と黒』だけに、エツェル版のテキストが何に依拠して刷られたのかという問いは一考に値しよう。

1

エツェル版の異文のうち最も重要なものは第36章のエピグラフ・題辞であり、初版の第2巻・第6章のそれとは全文が異なっている(章番号の相違は、一巻で造本されたエツェル版が一冊を通して番号をふっていることに因る)⁴⁾。マルチノがこの異同をコロンの手を介した修正の所産と見なしていたのに対し、ヴェーゲサックは初版の当該頁にアスタリスクの付された折り番号が印字されているのに着目し、カルトンによるエピグラフの変更がおこなわれたことを指摘した⁵⁾。「カルトン carton」とは、本刷り後にどうしても訂正しなければならぬ箇所が見つかったときに作られる差し替え刷りのことである。たとえば『赤と黒』初版のような八折判の場合、ひとつの折り丁は16頁からなるが、判型を組み直して修正するとなると経費が著しくかさむので、訂正箇所を含む一葉(表裏2頁)を刷り直して差し替えるのである。

初版にはほかにも2つのカルトンがあり⁶⁾、総計3つのカルトンはいずれも第2巻目に綴じられている。これらのカルトンに相当する部分のエツツェル版の重要な異文は集中しており、前述の第36章のエピグラフ以外にも、同章と第38章の本文にはオーストリア宰相メッテルニヒに対する揶揄をふくむ興味深いヴァリエーションが登場する⁷⁾。ヴェーゲサックによれば、どの異文もカルトンによる差し替え前の元の本文に属するのだという。つまりコロンの修正とはおよそ無関係なのであって、そこには初版刊本の「前 = テキスト」をかいま見ることができるのである。

カルトンによる修正がスタンダール自身の意図にもとづくことは、当初リエステ駐在フランス領事に任命された彼が、オーストリア領へ赴任する前に書いた手紙によっても裏付けられる。1830年11月6日の旅立ちを間近にひかえた作家は、『赤と黒』の刊行者アルフォンス・ルヴァヴァスールに宛てた同月付の書簡のなかでカルトンの処置について念を押している。「友情^{あかし}の証として、一冊たりともカルトン無しに売らせたりしないようお願いします」⁸⁾。たしかにこの一文からは、外交官としての自らの地位を危うくしかねない政治的な仄めかしを、是が非でもテキストから削除しておかねばならないという切迫した危惧が伝わってこよう⁹⁾。もちろん、この修正は正誤表では対処できない。

以上のようにカルトンにかんするヴェーゲサックの考証は見事である。カルトン以前の異文を含むエツツェル版が、初版の刊行テキストに依拠していないことは、彼の論証によってほぼ確定されたといつてよい。

では、ロマン・コロンのジュール・ピエール・エツツェルに手渡したのは何であったのか。ヴェーゲサックが考えるように『赤と黒』の清書原稿だったのだろうか。そう肯んじえないのは、エツツェル版やミシェル・レヴィ版にあたってみると分かるが、初版第2巻目の第7シートに印刷された刊行者の傍注、すなわち「このシートは1830年7月25日に組み付けられ、8月4日に刷られた」という記述をどちらの版も採録しているからである¹⁰⁾。原稿や

エツツェル版『赤と黒』をめぐって

ブラカールの段階ではけっして印字されるはずがないこの注記が、エツツェル版等でも活字になっているという事実から、同版のテキストが初版の浄書原稿に依って印刷されたという推測には疑義が生ずるのである。

そのうえヴェーゲサックの考察では、『赤と黒』の初版と時期を接して印刷された第2版（十二折判・全6巻）のテキストが十分に検証されているとは言いがたい¹¹⁾。1830年11月13日公刊の初版に遅れること112日、翌年の3月5日ようやく発売された第2版のほうは、スタンダール自身の手によって校正がなされていないという理由から、これまでずっと『赤と黒』の校訂者たちに顧みられずにきた。しかしながら、作家に「私の大使」¹²⁾と呼称されるほど信頼をえていたコロンの、前者のイタリア滞在中にルヴァヴァスールとの仲介を一手に引き受けた事実を考慮するならば、問題検討の際にこの第2版を看過することはできない。

われわれはエツツェル版の底本を突きとめるために、初版の本文と他の3つの版に含まれる異文との比較を試みるが、あらかじめ一言ことわっておくと、以下では字句や文章レベルでの異同だけをとりあげることになる。その理由は、改行や句読点の付置、イタリック体や数字、大文字などの扱いに由来する表記上の相違をも考察の対象にしてしまうと、それぞれの版の植字工や校正係まで考慮せねばならず、誤植なのか訂正なのか、そして後者の場合は誰の判断によるのか、といったことが判じ難いためである。また初版と第2版には正書法が国定となる以前の綴りが少なからず認められるが（たとえば「ornemens」「momens」「habitans」など複数形における語尾の「t」の省略）、もちろんこれらも考察の対象からはずす。

まずエツツェル版には、カルトンに相当する部分以外にも200を超える異文が認められる¹³⁾。なかには誤植によるヴァリエーションもあるが、そのほかはほとんどがマルチノが考えるようにコロンによる訂正に帰することができよう¹⁴⁾。一例を挙げると、初版テキスト中の「rapide」や「rapidement」という語が、しばしばエツツェル版では類義語に置き換えられている¹⁵⁾

- (1) Il s'habilla rapidement et suivit M. Chélan [L1 ,t .1 ,p .178 ,l 3]
Il s'habilla rapidement et suivit M. Chélan [L2 ,t 2 ,p 38 ,l .16 17]
Il s'habilla promptement, et suivit M. Chélan [H ,p 94 ,l 23 24]
Il s'habilla promptement, et suivit M. Chélan [ML ,p .100 ,l .12 13]
- (2) avec un air qui perdait rapidement de sa gravité [L1 ,t .1 ,p .183 ,l 5 6]
avec un air qui perdait rapidement de sa gravité [L2 ,t 2 ,p 46 ,l 8 9]
avec un air qui perdait subitement de sa gravité [H ,p 96 ,l 41 42]
avec un air qui perdait subitement de sa gravité [ML ,p .103 ,l .12 13]
- (3) La vue de cette violence éloigna rapidement les derniers reproches qu'elle se
faisait pour sa trop rapide victoire [L1 ,t .1 ,p 233 ,l .14 15]
La vue de cette violence éloigna rapidement les derniers reproches qu'elle se
faisait pour sa trop rapide victoire [L2 ,t 2 ,p .121 ,l .14 17]
La vue de cette violence éloigna instantanément les derniers reproches
qu'elle se faisait pour sa trop rapide victoire [H ,p .123 ,l 24 25]
La vue de cette violence éloigna instantanément les derniers reproches
qu'elle se faisait pour sa trop rapide victoire [ML ,p .132 ,l 23 25]
- (4) Julien se promet de rapides succès [L1 ,t .1 ,p 308 ,l 3 4]
Julien se promet de rapides succès [L2 ,t 3 ,p 24 ,l .12 13]
Julien se promet de prompts succès [H ,p .162 ,l 33 34]
Julien se promet de prompts succès [ML ,p .175 ,l .17]

ほかにも同様の異文が10箇所強、エツツエル版のテキスト全体にわたって散見される。「rapide」や「rapidement」の近接した使用を修正するケースもあるが、概してこの2語への偏重をただそうとしたようにも思える。とにかく

エツェル版『赤と黒』をめくって

これら一連の置き換えには、フランス語の文章作法に則って表現を手直ししようとする意図が透けて見えるのである。

コロンの校正の筆をとったことは、エツェル書店との間でとり交わされた契約書に、彼が校正をおこなう旨の条項が記されていることから疑えない¹⁶⁾。問題は前掲の訂正が作家の遺志に従った結果なのか、それともコロンの自身の判断によるのかという点に存するのだが、われわれが後者だと見なす根拠は『赤と黒』の手沢本にある。

スタンダールが自作の出版のたびに白紙頁を挟んだ自家用本をつくり、その後の新版を期して文章に手を入れたり覚書を記したりしたことはつとに知られている。『赤と黒』も例外ではなく、今日その現物はミラノ市立ソルマーニ図書館の所蔵となっている。これは彼の友人でチヴィタ・ヴェッキアの骨董商ドナート・ブッチに遺贈されたスタンダールの蔵書中の一本で、そこには加筆や削除などが備忘とともに記されている。もしも作家がコロンに修正済みの原稿を託していたのであれば、とうぜんそれらの訂正がエツェル版に反映されているはずだが、しかしイヴ・アンセルが示唆するようにそのような形跡は微塵もなく¹⁷⁾、スタンダールの書き込みはひとつとしてエツェル版の異文と合致しない。したがってマルチノが推測したように、生前にスタンダールが修正の指示をコロンに託し、後者はそれにもとづいてテキストを訂したとは、とうてい考えにくいのである。

エツェル版のそのほかの異文の多くは動詞の時制や冠詞、補語人称代名詞等にかかわるものであり、総じて軽微な訂正を思わせる。また文脈の整合性や文体の観点からしるべきとなされた修正と推測できるものも少なくはなく、その後発的な特徴から考えて、やはりコロンの校閲に帰することができよう。他方で、慎重な判断を要する厄介な異文も見られる。それは次に挙げるように字句が削除されたり、置き換えられたりしたケースである

- (5) Mais alors plus d'avancement, plus d'ambition pour moi, plus de ce bel état de prêtre [L1 ,t .1 ,p 32 ,l 7 9]
Mais alors plus d'avancement, plus d'ambition pour moi, plus de ce bel état de prêtre [L2 ,t .1 ,p 44 ,l 2 4]
Mais alors plus d'avancement, plus de ce bel état de prêtre [H ,p 20 ,l .15 16]
Mais alors plus d'avancement, plus de ce bel état de prêtre [ML ,p .18 ,l 22]
- (6) Sur la brune, Julien alla prendre sa leçon [L1 ,t .1 ,p 33 ,l 4 5]
Sur la brune, Julien alla prendre sa leçon [L2 ,t .1 ,p 45 ,l 9 10]
Vers le soir, Julien alla prendre sa leçon [H ,p 20 ,l 33 34]
Vers le soir, Julien alla prendre sa leçon [ML ,p .19 ,l 5 6]
- (7) elle jeta un petit cri [L1 ,t .1 ,p 339 ,l .15]
elle jeta un petit cri [L2 ,t 3 ,p .70 ,l 5]
elle jeta un grand cri [H ,p .178 ,l 38]
elle jeta un grand cri [ML ,p .192 ,l 35]

これらのヴァリエントに共通する特徴は、修正の理由がおしなべて不明であることだろう。引例(5)のような字句の削除については誤植に由来すると考えられなくもないが、ほかの2例はそう見なせまい。とくに(7)の例では、形容詞が対義語に置き換えられているものの、訂正の根拠となりうる情報はテキストのどこにも登場しない。つまりここには「作者」の想像力のみ許される恣意性が認められるのである。はたしてこういった修正もまたコロンの独断によるのであろうか。

ちなみに本作りにかんして、ロマン・コロンははずぶの素人ではない。自著

エッツェル版『赤と黒』をめくって

『1828年のイタリア，スイス旅日記』（1833年）を始め，啓蒙主義時代の思想家シャルル・ド・ブロスの著作や評伝の出版を手がけた物書きの端くれである。亡き従兄の作品集刊行に際して親愛の情のあまり，校閲にまで踏み込んでしまったとしても不思議はない。

ところがヴェーゲサックが考えるように，コロンのエッツェル版の底本として初版作成時の清書原稿をもちいたとするならば¹⁸⁾，まったくべつの解釈も成り立つ。たとえば，引例⁽⁷⁾の「un grand cri」は初版の原稿段階で記されていた語句であり，それをスタンダールが校正の折りに「un petit cri」と書き換えていたとも考えられるのだ。もちろんエッツェル版の校正の際にコロンの初版の本文との厳密な照合をおこなっていれば，原稿段階の字句が修正されずに残る余地はないのだが，当時61歳の彼がそれを怠ったことは，エッツェル版では初版のカルトンに相当する部分で異文がそのままになっている事実から明らかである。

いったい真相はどうか。結論を先に述べるならば，われわれはやはりコロンの独断による修正，つまり悪くとれば改竄であったと考える。さらに言えば，彼がエッツェル版の出版で依拠したのは，初版の浄書原稿でもそのほかの「前＝テキスト」でもなく，『赤と黒』第2版のテキストであったはずだ。以下に順を追って，その根拠を示そう。

2

『赤と黒』の第2版も初版と同じバルビエ印刷所で刷られているが，その工程はまったく同じというわけではない。まず，組版の際に初版の清書原稿が再利用されることはなかったはずである。そのようなことをすれば，ゲラの段階で初版の著者校正の結果をいちいち反映させねばならず，作業能率が悪すぎるからだ。より効率のよい方法として選ばれたのは，初版の本刷りに依拠して活字を組むか，あるいは八折判初版の刷りだし後に解版せず，十二折用の判型に合わせてそのまま活字を組み替えるかのどちらかであろう。初

版と第2版ではエピグラフと本文にそれぞれ同じ種類と大きさの活字が使われているので、後者の方法もけっしてありえない話ではない。

また、組版の時期にも注意を要する。第2版の活字が組まれたのは、初版の発売後ではない。その根拠をなすのは、十二折判でも八折判と同じく3箇所に綴じられたカルトンである¹⁹⁾。カルトンの採用は、修正すべき箇所がすでに本刷りになっていたことを意味する。すなわちスタンダールがイタリアに向けて旅立つ頃、第2版の印刷も初版のそれと並行するかたちでかなり進んでいたのである。かりに第1版公刊の1830年11月13日以後、遅れて第2版の組版が始められたのだとしたら、わざわざ一手間増えるカルトンに訴えずとも問題箇所を訂正できたはずだ。そうしなかったのは、もはや当該箇所の本印刷が終わってしまっており、それが不可能な状況にあったと見なすべきであろう。付言するならば、両版の発売時期に4カ月近くの開きがあるのは、ユルバン・カネル書店との共同販売といった、書店の販売戦略に因るのではないだろうか。

ここで誤解を避けるために、カルトンに絡めて印刷作業の流れについて触れておこう。『赤と黒』初版および第2版の工程では、校正作業が完了した時点で一度に全シートの本印刷がおこなわれたのではあるまい。そうではなく、折り番号の順に組版されたシートは印刷所の校正係によるゲラ刷りの校正、著者校正、そして最後に校正係による試し刷りの点検を経て、すぐに本印刷に付されたと思われる。初版の第2巻・第8章にわざわざ「刊行者の注 *Note de l'éditeur*」とことわって印字された、前述の傍注がそれを証している。「このシートは1830年7月25日に組み付けされ、8月4日に刷られた *Cette feuille, composée le 25 juillet 1830, a été imprimée le 4 août*」²⁰⁾。「*imprimée*」という語を文字通りの意味に解せば、同シートは8月4日にはすでに本刷りになっていたと見なせるのである。

このようにシート単位で進められる印刷工程は、べつの観点からも確かめられる。スタンダールがトリエステ領事の辞令を受けとったのは1830年9月

エツツエル版『赤と黒』をめぐって

25日。外交官となる身にとって不都合な文言を小説から削除しようと彼が思い立ったのは、とうぜんこのとき以後であろう。遅くとも翌月下旬までに作家が書店側へ修正を打診し、カルトン作成の運びとなったはずだ。11月始めにルヴァヴァスールに送られた書簡 「ほんとうにもう頭が働かず校正刷り *des épreuves* を直すことができません。どうかカルトン *les cartons* をもう一度誰かに読ませておいてください」[イタリックによる強調は引用者]²¹⁾。ここに看取できるのは、すでに出来あがったカルトンにはスタンダールが一度目を通してしているのに対して、第2巻最後のいくつかの校正刷りシートはまだ受けとってさえおらず、たとえ受けとったとしてももう校正できないという状況である。換言するならば、カルトンが施されるシートはすでに本印刷が終わっているのに対して、最後のほうのそれはまだ著者用の校正刷りになっていないのだ。かような作業のずれは、上述した印刷工程でなければ生じえない。

第2版の工程も、基本的には初版と同じくシート単位で進められたと考えられる。異なるのは、カルトンによる差し替え前の本刷りを底本にする、もしくは判型を組み替えるという手段に訴えて、校正作業から著者校正を省略している点であろう。

もちろん第2版の印刷工程においてもバルビエ印刷所の校正係による誤植の点検はおこなわれている²²⁾。たとえば初版に見られた次のような誤植は、第2版でしかるべく訂正されている

(8) Au revers on lisait les deux premiers mots d'une ligne, c'étaient : *Le premier pas*. [L1 ,t .1 ,p 41 ,l 8 10]

Au revers on lisait les deux premiers mots d'une ligne, c'étaient : *Le premier pas*. [L2 ,t .1 ,p 56 ,l .17 19]

(9) ce vin[...]sur pris place [L1 ,t .1 ,p 242 ,l 26 27]

ce vin[...]pris sur place [L2 ,t 2 ,p .135 ,l 7 8]

- (10) le marquis était retenu chez lui par un attaque [L1 ,t 2 ,p .77 ,l 8 9]
le marquis était retenu chez lui par une attaque [L2 ,t 4 ,p .66 ,l 8 10]

ところが、初版の誤植を見逃しているケースもあり、なかでも次の例は第2版の印刷工程を考えるうえできわめて重要な意味をもつ。

- (11) dit-il avec avec un soupir [L1 ,t 2 ,p 249 ,l 5]
dit-il avec avec un soupir [L2 ,t 5 ,p .74 ,l .12 13]

もし何らかの原稿にもとづいて第2版が組版されたのだとしたら、このような植字のミスが初版と同じ箇所でも繰り返される確率はほとんど無きに等しい。おそらくは、八折判から十二折判へと判型を組み替える機械的な作業であったからこそ、初版の誤植がそのまま残ってしまったのではあるまいか。ヴィクトル・ユーゴーやアレクサンドル・デュマなど重版の見込まれる、よほどの人気作家の作品でもなければ、ふつうは各シートの本印刷終了後に順次解版されたはずで、発行部数がわずかに初版750部、第2版750部の『赤と黒』もしかり、組置きの荣誉に浴したはずがない。印刷所にとっては初版シートの本印刷が済みしだい第2版用に判型を組み替えたほうが、新たに版を組むよりもはるかに合理的かつ経済的であっただろう。

では、ルヴァヴァスール両版の印刷工程を踏まえて本題に入ろう。なぜコロンがエツツェル版の底本に第2版のほうをもちいたと推定できるのか。今日われわれはスタンダールが第2版の校正にかかわっていないことを彼の備忘によって知っている。それゆえ『赤と黒』の校訂者たちは一様にこの版を尊重してこなかったのだが、しかしコロンの目には後発の版のほうが校正がより行き届いているように見えたとしてもおかしくはない。じっさい初版の

エツツェル版『赤と黒』をめぐって

誤植が訂正されているのを確認したように、初版の最終テキストに印刷所による校正をさらに重ねたものが第2版のそれになるからである。おまけに彼がルヴァヴァスール両版の印刷工程の実状にさほど通じておらず、従兄の手で第2版の校正もおこなわれたと考えていたならば、なおさら第2版のテキストのほうを底本に選んだはずであろう。そのように初版を軽視するコロンの姿勢は、次に挙げる例に窺い知れる

- (12) il s'était conduit d'une manière plus prudente que brillante dans les cinq ou six dernières quêtes [L1 ,t .1 ,p 256 ,l .14 15]

il s'était con- // brillante dans les cinq ou six dernières quêtes [L2 ,t 2 , pp .155 156 ,l 22 2]

il s'était conduit d'une manière brillante dans les cinq ou six dernières quêtes [H ,p .135 ,l 5 6]

il s'était conduit d'une manière brillante dans les cinq ou six dernières quêtes [ML ,p .145 ,l 28 29]

エツツェル版とレヴィ版では、原文の一部省略による修正が施されているのだが、問題はその内容である。明らかにコロンによる異文は、初版テキストの文意をねじ曲げている。そもそも手直しが必要とも思えないが、たとえ書き改めるにしても「il s'était conduit d'une manière prudente dans...」とするのが正しい²³⁾。かように不適切な修正となってしまったのは、コロンが第2版のテキストに依拠したためであろう。第2版には改頁後に数語が欠落するという大きな誤植がある。エツツェル版の校正中に彼はこの誤植に直面し、前後の文脈から欠落した字句を補ったにちがいない。初版の本文を参照していれば容易に避けることのできた誤りである。

さらに傍証を固めよう

- (13) Jamais au contraire ses enfans n'avaient été joyeux gais. [L1 ,t .1 ,p 255 ,
l 25 26]
Jamais au contraire ses enfans n'avaient été plus joyeux et plus gais. [L2 ,
t 2 ,p .155 ,l 3 5]
Jamais, au contraire, ses enfans n'avaient été plus joyeux et plus gais. [H.
p .134 ,l 24 25]
Jamais, au contraire, ses enfans n'avaient été plus joyeux et plus gais. [ML.
p .145 ,l .15 16]
- (14) il amuse M. de La Mole [L1 ,t 2 ,p 33 ,l 4]
il a amusé M. de La Mole [L2 ,t 3 ,p 201 ,l .15]
il a amusé M. de La Mole [H ,p 224 ,l 30]
il a amusé M. de La Mole [ML ,p 244 ,l 32 33]
- (15) ou elle me méprise et me maltraite [L1 ,t 2 ,p 326 ,l .14 15]
ou elle me méprise, ou elle me maltraite [L2 ,t 6 ,p .7 ,l .12 13]
ou elle me méprise, ou elle me maltraite [H ,p 382 ,l .14 15]
ou elle me méprise, ou elle me maltraite [ML ,p 413 ,l 21 22]

いずれも第2版で校正係が本文に手をくわえた例である。エッツェル版とレヴィ版はこういった第2版での修正をすべて踏襲しているが、なかでもこの3例は注目に値しよう。これらは誤植の訂正ではなく、語法や文体上の改善にあたることは一目瞭然であり、校正係による一步踏み込んだ修正といえる。しかも(13)を除けば、初版の表現に文脈的、あるいは文法的に難があるというわけではけっしてなく、そのままにしておくことも、別様に改めることもできたのである。じっさいマルチノ以降の諸校訂版は、(14)と(15)の箇所で初版の表現をそのまま採録している。エッツェル版の校正の際にコロンが偶然

エッツェル版『赤と黒』をめぐって

にも3箇所にわたって第2版と相同の修正をおこなったとは考えにくく、やはり彼がその底本に第2版の本刷り、厳密に言えばカルトンによる差し替え前の本刷りをもちいたと見なすほかあるまい。

ところで、第2版に認められる同種の異文のなかには、スタンダードを仰天させたものがある

(16) Il était petit, mince, laid, fort bien mis, passait sa vie au Château [L1 ,t 2 ,
p 65 ,l 21 23]

Il était grand, mince, laid, fort bien mis, passait sa vie au château [L2 ,t 4 ,
p 48 ,l .1 2]

Il était grand, mince, laid, fort bien mis, passait sa vie au château [H ,p 242 ,
l 20 21]

Il était grand, mince, laid, fort bien mis, passait sa vie au château [ML ,
p 263 ,l .11 13]

スタンダードは引用部分について『赤と黒』の手沢本に次のような備忘を記している 「第2版には *grand* がある。いったい誰がこう変更したのか」²⁴⁾。この記述こそ、作家が第2版の校正作業に関与していないと見なしうる根拠なのだが、それにしても引用文が説明しているのは、ラ・ジューマート氏という、ここ第2部・第5章末尾でのみ言及される人物であり、なぜバルビエ印刷所の校正係が「背が高い」という対義語に置き換えたのか、にわかには理解できない。故意の仕業とは思われず、おそらく原因にはカルトンの処置が関係しているように思われる。

引用部分は、初版では最初のカルトンに含まれている。カルトンは表裏一葉の2頁単位で刷られるため、このカルトンの範囲は第2巻の65、66頁となる。主たる修正の対象は66頁、すなわち裏面に登場する第6章冒頭のエピグラーフであり、全文が差し替えられている。このときスタンダードはほかの修

正の機会を見逃さず、ついでにカルトンの表面^{おもて}である65頁（第5章末）のほうも見直して、もとより「grand」としていたラ・ジューマート氏の背丈を「petit」に書き換えたのではあるまいか。なおそのうえに、文の後続部分に置かれた「château」という語が宮廷を指すことをよりはっきりさせようと、「Château」と語頭を大文字にしたのだろう。

かかる65頁の修正が第2版の刊行テキストに反映されなかったのは、カルトンの範囲が異なることに起因しよう²⁵⁾。第2版のほうでは最初のカルトンは第36章（第2部・第6章）に始まる。つまり初版第2巻の66頁に相当する部分、初版カルトンの裏面の内容が表面にきているのである。とうぜんスタンダールが初版カルトンの65頁にくわえた修正は、第2版カルトンに活かされるはずはなく、「grand」も「château」も元のままのかたちで製本の運びとなったにちがいない。そしてカルトンのことなど何も知らされていなかったコロンは、第2版の本文を、すなわちカルトンによる差し替え前の本刷りをエツェル版の底本にしたために、「grand」と「château」をそのまま残すことになってしまったのであろう。いずれにせよ引例¹⁶⁾は、コロンの作家から修正の指示を託されていず、独断で第2版に依拠してエツェル版をつくり、初版テキストとの照合を疎かにしたことの、新たな裏づけといっても過言ではあるまい。

結 語

擲筆するにあたって、『赤と黒』第2版とエツェル版、レヴィ版とのそのほかの共通点にも触れておく。初版が2巻からなり、それぞれが第1章から始まっているのに対して、6巻からなる第2版のほうは全巻を通しての章番号がふられている。後者の方式をコロンの手がけた2つの版本が踏襲していることも、小論の考証を補足するものであろう。

なお、読者への献辞の扱いについても同様の推測が成り立つ。かの有名な「幸福な少数者へ」という献辞は、1817年刊行の『イタリア絵画史』第2巻

エツェル版『赤と黒』をめぐる

のエピグラフに初めてもちいられ、同書1825年版以後は、『ローマ散歩』（1829年）や『パルムの僧院』（1839年）といった著作の掉尾を飾るべく、本文の終わる頁におかれている。ところが『赤と黒』の初版本の場合、それぞれの巻末の目次の下という、ごく目立たない所に印字されているのだ。このような仕儀に立ち至ってしまったのも、印刷工程を最後まで見届けられぬままイタリアへと旅立たねばならなかったスタンダールの残した指示が、カルトンの依頼や校正の一任による慌ただしい作業に紛れて印刷工房へは十分に伝わらなかったためであろう。しかも6巻がそれぞれ別立ての目次をもつ第2版では、献辞は活字にすらなっていない。工程の最後に組版となった初版の目次は、組み替えてもむろん役に立たず、解版され、そこに添えられていた献辞は、第2版の目次を組む折りに失念されてしまったのであろう。第2版に信をおくあまりロマン・コロンはこの重大な欠落に気づかずに、読者への献辞を欠いたままエツェル版を、ついでミシェル・レヴィ版を上梓するに至ったのである。

註

- 1) Voir Henri MARTINEAU, «Introduction», in *Le Rouge et le Noir* de Stendhal. Texte établi, avec introduction, bibliographie, chronologie, notes et variantes par H. MARTINEAU, Paris : Garnier Frères, coll. «Classiques Garnier», 1939 [1961, pp. XXXI-XXXIV]. なおマルチノよりも先に、初版の本文と1854年のミシェル・レヴィ版のそれとを比較したジュール・マルサンは、1923年に刊行されたシャンピオン版『赤と黒』の校註に異文を挙げているが、誤りが少なくない。
- 2) Voir Pierre-Georges CASTEX, «Notes», in *Le Rouge et le Noir* de Stendhal. Texte établi avec sommaire biographique, introduction, bibliographie, variantes, notes et dossier documentaire par P.-G. CASTEX, Paris : Garnier Frères, coll. «Classiques Garnier», 1973, p. 590.
- 3) Voir Yves ANSEL, «Notes», in *Œuvres romanesques complètes I*. Préface de Philippe BERTHIER. Édition établie par Y. ANSEL et Ph. BERTHIER, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 2005, pp. 1078-1079.
- 4) Voir STENDHAL, *Le Rouge et le Noir. Chronique du XIX^e siècle*, Paris : J. Hetzel,

- 1846 ,p 243 ; voir également STENDHAL, *Le Rouge et le Noir. Chronique du XIX^e siècle*, Paris : Levavasseur, 2 vol. in 8^o, 1831 ,t 2 ,p 66 .
- 5) Voir Thomas von VEGESACK, «Les cartons de “Rouge et Noir”», *Stendhal Club*, n^o 75 , 15 avril 1977 ,pp 260 263 .
- 6) Voir STENDHAL, *Le Rouge et le Noir* [éd. originale], op. cit., t 2 ,pp 69 ,70 ,103 et 104 .
- 7) Voir STENDHAL, *Le Rouge et le Noir* [éd. Hetzel], op. cit., pp 244 245 .
- 8) STENDHAL, *Correspondance générale*. Édition Victor DEL LITTO avec la collaboration d'Elaine WILLIAMSON, de Jacques HOUBERT et de Michel-E. SLATKINE, Paris : Honoré Champion, 6 vol., 1997 99 ,t 3 ,p .784 .
- 9) 第2巻・第6章のエピグラフのほかにスタンダールが何としても修正したかったのは次の文であろう «Sa physionomie noble et vide, annonçait des idées convenables et rares : l'idéal du diplomate à la Metternich. Napoléon non plus ne voulait pas d'officiers penseurs dans ce qui l'approchait.»(STENDHAL, *Le Rouge et le Noir* [éd. Hetzel], op. cit., p 244); «Désespérant de l'Europe telle que M. de Metternich l'a arrangée, le pauvre Altamira en était réduit à penser que, quand les États de l'Amérique méridionale seront forts et puissants, ils pourront rendre à l'Europe la liberté que Mirabeau leur a envoyée.»(*ibid.* , p 262)
- 10) Voir *idem.* ; voir aussi STENDHAL, *Le Rouge et le Noir. Chronique du XIX^e siècle*. Seule édition complète entièrement revue et corrigée, Paris : Michel Lévy Frères, 1854 , p 286 .
- 11) Voir STENDHAL, *Le Rouge et le Noir. Chronique du XIX^e siècle*, Paris : Levavasseur et Urbain Canel, 6 vol. in 12 ,1831 ,215 ,209 ,201 ,252 ,186 ,237 pp. なお第2版のほうはユルバン・カネル書店との共同出版となっている。
- 12) STENDHAL, *Correspondance générale*, op. cit., t 4 ,p 24 .
- 13) ミシェル・レヴィ版では新たに100以上の異文が加わるが、どれも軽微な修正であり、ロマン・コロンの印刷所の校正係の手によると見なされる。本文の比較から同版の底本はエッツェル版だと思われる。
- 14) Voir MARTINEAU, «Introduction», in *Le Rouge et le Noir* [éd. Martineau], op. cit., pp . XXXI-XXXIV.
- 15) 以下、引用においては、Levavasseur 初版を「L1」、第2版を「L2」、Hetzel 版と Michel Lévy 版はそれぞれ「H」「ML」と略記し、[] 内に頁数と行数を示す。なお初版と第2版には頁数の前に巻数を付す。
- 16) STENDHAL, *Correspondance générale*, op. cit., t 6 ,p 721 .
- 17) Voir ANSEL, «Note sur le texte», in *Œuvres romanesques complètes I*, op. cit., p 981 .
- 18) Voir VEGESACK, *art. cité*, p 262 .
- 19) Voir STENDHAL, *Le Rouge et le Noir* [2^{ème} éd.], op. cit., t 4 ,pp 49 ,50 ,53 ,54 ,55 , 56 ,103 ,104 ,105 et 106 .
- 20) Voir STENDHAL, *Le Rouge et le Noir* [éd. originale], op. cit., t 2 ,p .104 .言うまでも

なく、この傍注が活字に組まれたのは著者校正の段階ではなく、本印刷の当日だと考えられる。

- 21) STENDHAL, *Correspondance générale*, op. cit., t 3, p. 784 .
- 22) カステックスは初版よりも第2版のほうが誤植は多いと述べているが、しかしながら初版の誤植が第2版で修正されている点には触れていない。Voir CASTEX, «Bibliographie», in *Le Rouge et le Noir* [éd. Castex], op. cit., p. XCIV.
- 23) この部分の邦訳を前後を含めて引用しよう。ちなみに翻訳の底本は、初版の本文に依拠してマルチノが校訂したガルニエ版である。「ヴァルノ氏といえば、まるで泥棒のように金ばなれがよかった。ところが、彼町長は、聖ヨセフ会、聖母修道会、聖体秘蹟修道会等々のために最近五、六回にわたって行われた募金の際も、派手にというよりもむしろ賢明にふるまった方である」[強調は問題箇所](富永明夫訳『赤と黒』、中央公論社、1993年、159頁)。これに対してロマン・コロンの異文のほうは、「彼町長は、聖ヨセフ会、聖母修道会、聖体秘蹟修道会等々のために最近五、六回にわたって行われた募金の際も派手にふるまった」という訳になる。
- 24) STENDHAL, «Notes», in *Œuvres romanesques complètes I*, op. cit., p. 1077 .
- 25) 第2版のそのほかのカルトンでは、ずれを補うために葉紙が2枚(4頁)使われている。